



## 新本館棟グランドオープンに寄せて

名誉院長 大塚 昭雄

新本館棟完成記念誌が発刊されるにあたり私の平成10年4月から平成22年3月迄の12年間の院長の時を振り返ってみたいと思います。

平成10年4月1日、岡山大学第二外科清水信義教授の御推薦により第五代院長を拝命致しました。昭和47年に岡山大学を卒業し第二外科教室に入局し初めての勤務病院が当時の雲南共存病院でした。昭和48年1月から三年間お世話になりました。22年振りの復帰で不安ばかりでしたが当時の職員の皆様が多数在籍されて、また幹部となられていて非常に心強く思ったことを覚えています。

院長としてまずは診療部の充実を図ろうと思いました。1人科を複数体制に、消化器中心であった内科に循環器、内分泌科の医師確保等、関連三大学（岡山大学、鳥取大学、島根医大）の教室に派遣依頼をお願いに廻りました。平成12年には過去最高の34人の診療部の体制となり平成13年3月より当直を二人体制にすることが出来ました。この体制は医師不足が顕著となる18年頃まで続きました。

介護保険制度が平成12年度より開始となり病院に隣接していた県の特別養護老人ホーム簸の上園の移転が決まり跡地利用の為、県に譲渡を陳情し平成14年4月1日介護療養病床（ふれあい病棟）をオープンすることができました。併せて病棟再編を行い30床の回復リハビリ病棟も14年6月に開設しました。急性期・回復期・慢性期の一連とした医療と訪問看護、訪問リハビリ、訪問介護の在宅ケア機能を充実させ地域包括医療の提供を目標としました。病院全体の質の向上を図るために医療機能評価取得の機運が高まり平成14年4月から準備を行い、平成15年10月に受審し平成16年2月に合格することが出来ました。残念ながら医師不足が重なり5年後の更新は断念しましたが一つの目標に向かい全職員が努力したことは非常に貴重な体験であったと思います。

平成16年度から医師卒後研修の必修化、大学病院の独立行政法人化が始まり地域の病院の医師確保に大きな影響を及ぼしました。これまで医師派遣をお願いしていた大学の教室も入局者が減少し派遣どころか医師の引き上げが行われていました。18名に減少した診療部で救急医療維持の為医局をまとめていただいた当時の松井、服部両副院長、大谷医局長をはじめ診療部の先生方には感謝の念しかありません。その中で二人体制であった精神科医師の辞職が続き平成19年3月に精神科病棟閉鎖に至ったことは痛恨の極みでありました。

平成19年12月には雲南病院経営危機の新聞報道もあり、責任は医師確保ができない院長にありと投書も多数頂きました。この頃大学の同期会に参加すると“大塚は癌ではないか”と云われました。当時の写真を見ると頬が落ち、かなりのストレスがかかっていたと思われました。このような中でも独自の医師確保に努め平成20年4月には専門医を確保し人工関節センターを立ち上げました。また院長経験者で二人の消化器専門医にも勤務して頂くことが出来ました。このように医師減少の中、少数精鋭で地域医療を守る為努力しました。平成20年5月には血糖測定器具の複数患者への使用が問題となり、大会議室で報道4社のスポットライトを浴びて謝罪会見を行ったことは今となれば懐かしい経験でした。平成21年9月には女性職員確保の為に院内保育所が開設され、マスコミでも話題となりました。

平成21年10月に全国国保地域医療学会を島根県と鳥取県の共同で松江市での開催が決定し、平成25年10月4日、5日の二日間で全国より千名を超える参加がありました。

平成23年4月1日より雲南市立病院がスタートするにあたり平成22年3月で院長を退任し、松井副院長が院長に昇格し、名誉院長を拝命しました。12年間の院長生活でしたが激動の中伝統ある雲南病院を次世代に引き継ぐ役目が何とか果たせたのではないかと考えています。新本館病棟が完成し「地域に親しまれ、信頼され、愛される病院」として益々発展されることを祈念し、併せて私を支えて頂いたすべての皆様に関心より感謝致します。